人とこの世界

鶴 高 健

河出書房新社

人とこの世界　©1970

昭和四十五年十月二十日　初版印刷
昭和四十五年十月二十五日　初版発行

著　者　開　高　健
発行者　中　島　隆　之
印刷者　中　内　佐　光
発行所　株式会社　河出書房新社／東京都千代田区神田小川町三の六
電話　東京（〇三）二九二一三七一一（大代表）／振替　東京　一〇八〇二
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　中西製本株式会社
定　価　七五〇円

0095-037022-0961

目

次

行動する怠惰 ……7
——広津和郎
自由人の条件 ……39
——きだみのる
マクロの世界へ ……71
——大岡昇平
誰を方舟に残すか ……101
——武田泰淳
不穏な漂泊者 ……129
——金子光晴
カゲロウから牙国家へ ……159
——今西錦司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

手と足の貴種流離 ……181
——深沢七郎
流亡と籠城 ……201
——島尾敏雄
惨禍と優雅 ……225
——古沢岩美
〝思い屈した〟 ……247
——井伏鱒二
絶対的自由と手と ……267
——石川　淳
地図のない旅人 ……289
——田村隆一
あとがき

人とこの世界

行動する怠惰

——広津和郎

広津和郎

小説家　評論家　明治二十四年東京生れ　早大英文科卒　『神経病時代』（大正六年）が文壇的出世作　カミュの『異邦人』をめぐる中村光夫との論争、松川事件をめぐる十年余の裁判批判は有名　昭和四十一年没

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

開高　広津さんのお書きになっていらっしゃるものを、ずっと読んでいくと、ひどく気の長い、あきれるほど気の長い忍耐の部分と、いきなり鉄火のごとくパチッとやってしまう、癇癖の強いところとがおありのようですね。

広津　うん。そうでしょうね。

開高　それで、読んでいて、どこで気が長くなって、どこでパチッとやっちまうのか、そこが面白いですね。はたから見ていますと。

広津　それは人によると、意志の強さでやったのではないかというように考えるが……。

開高　私もそう思いますが……。

広津　意志の強さはないんだ。意志を積みかさねていくというような、そんなものはないけれどもね。だいたいは非常な怠け者で、たまたま何か衝動に駆られると、そうするとパッとい

って、そうなると、何かそのことに凝るんだな。だけれども、意志は弱いも強いも、持ってないんじゃないかと思う。

都内の某料亭の午後遅く、広津さんがジュースをチビチビやりながら、ひそひそと話している。テーブルのこちらに私がすわって、ウィスキーをチビチビやりながら、それを聞いている。庭の植込みにまだら雪がのこり、部屋のすみではガス・ストーヴがぼうぼうと鳴っている。

いつかもこうだった。もう四年か五年も以前のことになる。松江の旅館の二階で夜ふけにやっぱりこうして広津さんから話を聞きつつ酒を飲んでいた。私はおなじことをたずね、広津さんはおなじことを答えた。眼も、口調も、超脱の気配もまた、おなじであった。その頃とくらべると、いくらか広津さんは起居の動作が緩慢になり、少し老けられたような気がする。

その頃、私はときどき広津さんといっしょに松川事件のことで地方を講演して歩いた。広津さんといっしょでないときもあった。けれど広津さんといっしょだと講演のあとで座談を聞くことができて、たのしかった。私が松川事件に顔をだしたのは終盤に入ってからほんのちょっとの期間で、とりたてていうほどのことは何もしなかった。ただ広津さんの座談を聞きたいばかりにでかけたのではないかと、いまになって思うことがある。中心と持続。広津さんにあるものが私には何もなかった。

イェルサレムのアイヒマン裁判から帰ってきたあとだったので私は講演会ではそのことを話し

たが、いつも三十分ほどをのこして切りあげた。すると広津さんがでてきて、その三十分を食べ、自分の持時間をくまなく食べ、さらにそれから三十分超過して食べる。そして宿に帰るとドテラを着て床柱を背にすわり、やおらオレンジ・ジュースをチビチビやりながら文学のこと、絵画のこと、骨董のこと、おしゃべりをはじめる。それが一時、二時までつづく。お付きの若い人が顎をだしてしまい、コソコソ部屋へひきあげる。それでも広津さんは、こちらがちょっと何かたずねると、〝ウン、それはね〟といって体をのりだしてくる。毎夜、毎夜、そうだった。

このときに聞いた無数の挿話、感想、寸言、名句は、『あの時代』や『年月のあしおと』や、そのほかの文章に書かれてあることが多かった。しかし、〝公序良俗〟を憚ってか伏せられているものも多かった。そのあたりの話がはじまると耳が勃起した。それだけがおもしろいのではないけれど、それはじつにおもしろいのである。話しっぷりがいいのだ。行く雲、流れる水のように話をしてきて、きっとさいごにはサゲやオチがさりげなくつくのである。登場人物が葛西善蔵とか、宇野浩二とか、菊池寛とか、小出楢重、梶井基次郎などと異彩を放つのが多い。そこへ一流中の一流の観察眼、無私の愛、歳月のヤスリに耐えのこった印象が入るのだから、お金をだしても聞きたいようなものだった。ときには杯をソッとおいてから、ざぶとんからころげおちて笑ったこともあった。あるときは岩波書店の講演旅行で、吉野源三郎氏といっしょだった。氏は私の観察によればこの世で子供しか愛さない荘厳な人であるが、それでもたまりかねて毎夜、深更にいたるまで、笑いくずれていた。

開高　それから葛西（善蔵）さんが東京を食いつめて弘前に都落ちしようと、上野から汽車に乗るときのことを、広津さんに、松江の宿で聞かされたのですが、広津さんと舟木（重雄）さんが、これ以上子供を作ってはいけないよというと、葛西が「そうはいうても、子供は生れるでのう」というので、そういうことをいっちゃいけないと……。

広津　それで停車場から、時間があるので、葛西がコンドームを買ったのではないか。

開高　いや、広津さんと舟木さんがコンドームを……。

広津　舟木だ。

開高　それで汽車に乗っていくのですね。ベルが鳴って、ポンと窓からコンドームの箱をほおりこんで……

広津　いや、少し君の想像が加わっているのではないかな（笑）。

開高　違います。僕の記憶では、そういうお話でした。

広津　そうだったかな。それは舟木ですよ。舟木がやった。

開高　そうでしょうか。今度からこれを使うのだよ、というようなことをいうと、葛西善蔵は、シートの上にあぐらをかいてすわったまま、弘前の方を向いて、「諸君、サラバじゃ」といって、フッと消えてしまったというのですが、僕が聞いたところでは。

広津　少し話がうますぎるようだな（笑）。しかし、どうも人の証言などというのは……。

開高　アテにならないですか（笑）。

広津　そこまで僕はいってなかったと思うが。

開高　そうでしたか。

広津　何か、そのとき持っていた袋が、こういう何というか忘れたが、寿という字か何か入っている、幸せな言葉の書いてある袋のようなものを持って、葛西が乗っていたのだ。寿という字と何だったか。信玄袋のようなもので、それを持って乗ってるのだよ。それとね、それでないときに、また葛西を送っていったことがあるのだな。そうすると葛西と何か僕は喧嘩したのだったかな。そうしたらば、君も俺も舟木から見ると、われわれよりも舟木は三日の長があるとかいってね、君も俺もマダマダダゾといって汽車に乗った。そういうことがあった。それは葛西と喧嘩したあとだった。

眼を細めて、天井を仰いで、声をたてて広津さんが笑うと、いつも十歳ぐらい若返って見える。みごとに変貌する。ドテラを着てそうやっていると、どこか古い下町の大旦那が湯上りに一杯ひっかけて昔話に興じている、といった匂いがでてくる。

広津さんの講演はいわゆる名調子ではなかった。大向うから拍手を浴びたり、歓声が湧いたりというものではなかった。聴衆に媚びもせず、ナメもせず、ぼそぼそと低声でやるのである。松川事件の検察側の論証の非合理、非整合ぶりを粉砕することに知力と意志が集中されていた。そ

れは実証に徹底し、論理の矛盾をあばくことに徹底していたから、もしこの事件に何の興味もない人が聞いたら、砂を嚙むようなものだったかもしれない。しかし、いくらかの知識を持っていると、それは名演説であることがわかった。朝鮮独楽は鞭でひっぱたいて廻すのだが、あれだ。広津さんの講演にはそういうところがあった。水の滴がポトリ、ポトリとおちるようなぐあいに地味に話を追ってきてから、タルンだなという感じがした頃にふいに一鞭、ピシャリとあてるのである。すると独楽は首をふって起きなおり、ふたたび回転をはじめるのであった。それを広津さんは、もう、十年もつづけていた。日本全国の町という町で、めぼしいところにはみんないった。裁判は二転、三転しだらだらとのび、〝マツカワ〟と聞いてもいまさらふり向くものもなく、〝ヒロツ〟というと〝えらい人〟と答えがもどってくるだけというぐらいにこの事件は歳月と倦怠のぬかるみにおちこんでしまっていた。しかし広津さんは倦まず、たゆまず、たのまれるまま東へ、西へ、飄々と辻説法師のようにでかけていって説きつづけたのだった。さむざむしい田舎町の公会堂の二階のすみから演壇を見おろして、何度も私は、ああ、とてもオレはダメダと思った。

「……（前略）……それはどんな事があってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず、生き通して行く精神――それが散文精神だと思ひます。それは直ぐ得意になったりするやうな、そんなものであってはならない。……（中略）……この国の薄暗さを見て、直ぐ悲観したり滅入ったりする精神であってはならない。そんな無暗に音を上げる精神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com